

都留文科大で富士山学を教え、保全の尊さを訴える

ひと

わたなべ とよひろ
渡辺 豊博 さん(63)



世界文化遺産への登録が決まる瞬間を、ユネスコの委員会が開かれたカンボジアで見届けた。「これで富士山の環境問題に関心が集まる。日本中の環境運動の原動力になれば」と胸を躍らせる。

山梨県の都留文科大で、国内唯一の「富士山学」を教える。自然、歴史、山岳信仰など幅広い側面から富士山を考察。授業で登山

者が捨てたごみを拾い、「スキー場の照明が、山麓の畑の害虫を食べるコウモリの生息を脅かしている」と語りかける。5年前、50人ほどでスタートした授業には今、100人を超える学生が集まる。

富士の裾野の静岡県三島市で育った。中2の夏休み、同級生と2人で駿河湾の海岸から富士山頂まで、2週間で歩いて往復した。「標高0からの登山」だ。道すがらおひねりをもらい、民家に無料で泊めてもらった。信仰集団「富士講」の白装束も着ることができた。「地元で息づく富士山信仰の本質を、身をもって感じた」

大学を出て、農業土木の技術職として静岡県庁に。1993年に富士山が世界自然遺産を目指した時は、進んで署名活動に加わった。その後、環境NPOを設立。バクテリアなどでし尿を分解する「バイオトイレ」を、山小屋に設ける取り組みに力を注いだ。

2008年から大学教授。「富士山が抱える環境問題は様々。遺産登録で、そこに向き合う覚悟が問われます」

文・写真 山田知英